

史遊会通信

NO. 207
平成24年3月12日
発行

事務局
03--3712
0651
下山田方

二月講演要旨

名曲に潜む詩情

—— 古文の楽しさ面白さ ——

鯨遊海

名曲「仰げば尊し」。卒業式で「螢の光」と共に歌われてきたこの懐かしのメロディが小学唱歌に登場したのは、明治十七年（一八八四）。曲はスコットランド民謡で作詞者は諸説あるが未だ確定していない。

「仰げば尊し我が師の恩
教への庭にもはや幾年
思えばいと疾しこの年月
今こそ別れめいざさらば」

惜別の情あふれる不朽の名作ではないか。ところで、この歌詞には或る偉大な歴史上の人物が潜んでいることをご存知であろうか。そしてそれは誰か。聖人孔子である。

種を明かそう。孔子の高弟顔回が師の孔子に感嘆して漏らした論語の一章がある。「之を仰げば弥高く、之を鑽れば弥堅し。之を瞻るに前に在れば忽焉として後に在り」
仰げば尊しは実はこの仰げば高くからの引用であった。これだけでは牽強付会と納得しない向きもある。では二句目の教への庭を探ろう。同じく論語に「詩經を学ばなければ人前で立派にもの言えないよ」と孔子が息子の鯉に庭で訓戒した逸話がある。教への庭は、この庭での訓えからの引用であった。後世「庭訓」という教育や学校を象徴する熟語となった。冒頭の二句に

例会のお知らせ

◎ 3月例会

日時 平成24年3月28日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 隆恵氏

テーマ 「韓国歴史ドラマに遊ぶ」

自由執筆 千坂精一・平山善之・中込勝則の諸氏

締切 3月末日

◎ 4月例会

日時 平成24年4月25日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 鍋屋次郎氏

テーマ キリシタン大名

「有馬一族」

自由執筆 三戸岡道夫・鯨遊海・

隆恵の諸氏

締切 4月末日

孔子が潜んでいることが判ろう。

二番の歌詞には「身を立て名を揚げ やよ励めよ」とあるが、これは漢代の書である孝經からの引用だし、三番の「螢の灯」積む白雪」は晋書からの引用である。つまり近代化を急ぎ西歐化に邁進していた明治初期の日本であったが、一方で豊饒なる中国古典、漢籍からもなお多くを学んでいたのである。

なお蛇足ながら「今こそ別れぬ」のめは、未来の推量の助動詞むの已然形のめである。これを京大の阿辻哲次博士は『漢字逍遙』という本で「目」と書いている。即ち「別れ目」と思い込んでいるのだ。実に嘆かわしい。めと目とは月とスッポン程にこの詞の叙情が違ってくる。別の言い方をすれば、専門家ですら古文が読めなくなっている——明治は遠くなった——ということだ。

次に名曲「螢の光」を採り上げてみる。古来卒業式で「仰げば尊し」と共に歌われ日本人の魂を揺さぶり続けてきた。最近では何故か敬遠されあまり歌われなくなったとも聞くが残念である。

この曲もスコットランド民謡で、詞は東

京師範学校の国史・漢文の教諭であった稲垣千穎が七五調で作り、明治十四年小学唱歌に載った。

「螢の光窓の雪

ふみ読む月日重ねつつ

いつしか年も過ぎのときを

あけてぞ今朝は別れゆく」

さて諸兄は右の歌詞の三句目、のときをの意味がお判りであろうか。「過ぎたるを」とは馴染めない文章だ。

では失礼乍ら諸兄はお経を読む如く意味不明のまま唱っておられたのか？ 試しに何人かにのときをの意味を聴いてみたが全員が答えられなかった！

これは万葉集、古今集、源氏物語以来の伝統的な修辭法の「掛け言葉」である。即ち「いつしか年も過ぎ、杉の戸を開け、明けてぞ今朝は、別れゆく」となる。過ぎと杉、開けてと明けてが二つの意味を兼ねて使われている。従って意味が固定する漢字を用いず、仮名文字としたのである。

二番の歌詞にも掛け言葉は隠されている。「とまる（在校生）もゆく（卒業生）も（今日）限りとて、かたみに思うちよろず

の、心のはしをひとことに、さきくとばかり歌うなり」

古文で「お互いに」のことを「かたみに」という（ちぎりきななかに袖を絞りつつ末の松山波越さじとはお互いに涙でぬれた衣の袖を絞り乍ら絶体に愛の契りを違えることは永久に無いと約束し合ったものだったのに）。これと形見とを掛けた。更に「心の緒を一言に」と「心の橋を人毎に」との掛け言葉なのである。

詩人は一字一句に命をかける。中唐の詩人賈島は二句を作るのに三年をかけた。

「二句三年得 一吟雙淚流」。

かくして日本の文人たちも、古来漢字仮名交り文を磨き上げ、精妙な表現力を持つ近代言語に仕上げてきた。

それにも拘わらず、明治に作られた古文が日々遠ざかりつつある。何とも勿体ないことだ。私たちは我が民族の遺産である古文Ⅱ文語文にもっと親しみ、日常から遠ざけてはなるまい。

自由執筆

真相は藪の中

— 竜馬は誰に殺されたのか —

太田 精一

「申渡」庚午（明治三年）九月二十日

静岡県 元京都見廻組 今井信郎
其方儀京都見廻組在勤中 与頭佐々木唯三郎指図ヲ受 同組ノ者共ニ高知藩坂本龍馬捕縛ニ罷越討果候節 手ヲ下サズトイエドモ右事件ニ関係致シ 加之其後及ヒ脱走シバシバ官軍に抗撃 遂降伏致シ候トハ乍申 右始末不届ニ付 屹度可処厳科処 先般被仰出之御趣意ニ基キ 寛天ヲ以テ禁固申付ル

但静岡藩工引渡遣ス

右申渡越受書申付ル

静岡藩士族高倉清太郎

右之通申渡シ信郎儀引渡候間得其意

九月二十日

刑部省の下した今井信郎への判決文である。

慶応三年十一月三日坂本龍馬は、同僚の

中岡慎太郎と共に京都河原町通り「近江屋」の二階で惨殺された。明治政府は、龍馬被害が、佐々木唯三郎率いる京都見廻組の犯行であると断定した。

では、その中の誰が直接坂本龍馬に手を下したのか確証は得られていない。

判決文では、「手ヲクダサズトイエドモ右事件ニ関係致シ」として、今井信郎の供述を根拠に判決を下している。

「近江屋に向かったのは、佐々木、渡辺、高橋、桂、土肥、桜井と自分の七人である。佐々木が、案内役を乞い、渡辺、高橋、桂が続いて二階に上がった。何分にも自分も新参者なので、龍馬にいかなる不信点があったか、また、この事件に関し、指示がどこで出たか承知していない」

この時、今井信郎はあくまで自分は「見張り役」であった、と主張したのである。供述を裏付ける証人となる人は、すべて戊辰戦争終結までにこの世を去ってしまった。

今井は、静岡の刑務所に収監された後、明治五年一月、特赦を受け釈放された。

出所後今井は、幕臣の頃から敬服していた牧之原開墾の頭中條景昭を訪れ、身の振り方を相談した。中條の推薦などもあり、

今井は、駿府城の跡地で学校を設立、しばらく教育に携わっていたが、明治九年三月には、静岡県吏一〇等出仕に補され八丈島に配属になった。八丈島では、戸籍の整備、貯水池の造成、八丈織の奨励、学校の設立など数々の業績を上げている。

明治十年、今井は、西南戦争に官軍方として参戦すべく志願したが、真意は、途中で西郷軍に味方するつもりだったという。戦争は終結。再び中條を頼り、妻「いわ」と共に榛原郡阪本村二六〇番地に入植した。入植後三年したある日、見廻組仲間の結城無二三が、牧師の補佐役として静岡に赴任して来た。今井は、結城の静岡滞在中に、感化を受け、キリスト教徒になり、その後も彼との親交を深めている。

明治三十三年、今井は、妻「いわ」を伴って甲府に戻った結城無二三宅を訪れた。夕食に招待された今井は、彼との懐旧談に耽り、酒を過ぎた。その時、今井は、甲斐新聞に務める結城の長男の礼一郎に乞われるまま、龍馬事件について語った。その一部始終が甲斐新聞に掲載されたのである。そのことを記憶していた甲斐新聞編集長の岩田鶴城が、職を辞して京都に帰ってか

ら、「坂本龍馬事件始末記」と題して、雑誌「近畿評論」に発表した。このことが日本国中の話題を集めたのである。

結城礼一郎がマスコミ関係者と知って今井信郎は、真相を語ったのか、単なる酒の肴の語り草として話したのか分からない。

だが、礼一郎の質問は的を射たものであった。甲斐新聞の記事は、龍馬殺害の真相を知る有力な情報として扱われたのである。

話題も下火となった六年後の明治三十九年、西南戦争で功を立てた土佐藩出身の谷千城が、突如、講演の席で「近頃今井なる人物が坂本龍馬、中岡慎太郎兩名暗殺の真犯人だと自ら名乗り出たそうだが、真赤なウソで売名行為だ」と断じたのである。

再び世間は大騒ぎとなり、今井のもとに新聞記者が殺到した。憶測が飛び交い、明らかにならぬうちに見られる記事まで登場した。

が、今井は一切の取材に応じなかった。そんな今井が、三年後の明治四十二年十二月、心境の変化からか沈黙を破った。大阪新聞の記者（後の神戸新聞）和田天華氏の質問状に次のような内容の回答を寄せたのである。

一 坂本龍馬事件は、暗殺ではない。幕府の命令によるもので、職務によって捕縛に向かい格闘となった。

一 事件は、新撰組とは関係ない。自分は、当時京都見廻組と力頭であった。

一 龍馬はかつて伏見寺田屋で同心三名を短銃で撃ち、逸走した罪を咎めてのことである。

一 場所は、京都蛸薬師角「近江屋」二階。谷は、明治三年の今井裁判の判決内容を知らずの発言ではなかったようだ。

龍馬事件の真相は今でも確証が得られない。今井信郎が、明治三十三年結城家に招待されて、酒を飲みながら語ったことが真実であったか、それとも虚構であったのか、今日にいたっては、確かめようがない。

ただ、①今井は、事件からわずか前に見廻組と力頭の重要な役を与えられ、京に赴任している。②彼は、直新陰流榊原門下の逸材で龍馬襲撃には、組頭の佐々木唯三郎と並んでなくてはならない人物であった。③幕府の命令によって坂本捕縛に向かい格闘となった④今井信郎の孫幸彦氏が「事件当日、祖父が右手人差し指に傷を負い帰宅した」と祖母が語っていた。などの理由か

ら考え、今井は龍馬殺害に直接手を下したと考えて間違いないだろう。

明治三年四月十五日の勝海舟日記にも、

「今井信郎の自供内容を聞く。坂本龍馬暗殺は、佐々木唯三郎を首として、信郎の輩乱入という。もともと佐々木も上よりの指図があったと思われ、榊本対馬守（当時目付）あたりが指図したのではないか」とある。いずれにせよ、明治三年の今井信郎に対する判決文にあるように、また、状況的に見ても坂本龍馬殺害は、見廻組の仕業に違いない。ただ、佐々木唯三郎自ら手を下したのか今井信郎が切ったのか、定かではない。あるいは、二人がかりで倒したのかもしれない。

慶応二年十二月、徳川慶喜が、二条城から大坂城に移る時、二条城に残ることを決めた今井が、妻「いわ」に江戸に帰るよう説得した。その時「この刀で俺が坂本龍馬と中岡慎太郎を切った。ここに守護職から貰った褒状があるから、榊原先生にお目にかけて欲しい」と言ったとの逸話がある。だが、その褒状は残っていない。

今井は、最後まで誰が直接手を下したか語ることなく、牧之原の土となった。

自由執筆

親鸞の道

島津 隆子

昨年十二月初め、史遊会の忘年会に出席した後、目黒の自宅を出て、越後湯沢に来た。

今年は寒さも厳しく雪も多い。マンションの窓から眺める裏の山は吹雪に煙り、裾の木々は雪を被りながらすくと立っている。時々雪の降りよう風の吹きようで山容は千変万化。見飽きることがない。

そんなある日、何気なく入った書店で、五木寛之著の『親鸞』を目にし、求めた。それから私は五木親鸞にこてこてに翻弄されることになる。

八歳の忠範こと親鸞は好奇心の強い度胸のある賢い童だ。とんでもない競べ牛を見たい一心で、嘘をついてまで「馬糞の辻」にきたのだ。そこで一生記憶から失せることのない暗い眼をした牛頭王丸という狂牛をまじかに見た。その瞬間、何としたことか、この牛が親鸞めがけて突っこんできた。その時、知らない黒衣の大男に抱えられ、

危機一髪のところを助けられた。そして、連れてこられた鴨川の河原でのびのびと自在に生きる奇妙な大人たちに出会う。初めて覗き見た世界だ。その時、親鸞は自分に流れる放埒人の血を意識する。

人はなぜ苦しんで生きるのかなぜ争って生きるのか、と考えた童は十二歳で比叡山への入山をはたす。だが、心に重くのしかかるのは「自分には仏性がないのではないか」という疑問だった。幾つもの命がけの難行苦行を試みても、納得がいく成果が得られなかった。

しかも名門の比叡山には家柄の高い子弟が多く、本人の資質や研学や修行に關係なく出世していくのだ。世俗の身分がお山の階級としてまかり通っていることに呆然とする。

二十九歳の親鸞は法然上人のもとへ、巷の庶民たちが集う六角堂への百日参籠を果し、叡山を下りる決心をする。そして、法然に帰命した。

やがては比叡山を背負うほどの逸材と目されながら、学問も地位も栄達も捨てて山を下り、阿弥陀仏に帰依した一介の町の聖、

法然上人。

親鸞は法然の草庵に通い、深く法然に魅せられてゆく。

総てを捨て去り選択の仏法、つまり「なむあみだぶつ」の一念義を説く法然。彼もまた親鸞に熱い期待を寄せている。

異端の徒の親鸞には敵視する念仏者たちからの迫害が次々と降りかかる。しかし、親鸞はそれらから逃げることなく受けて立つのだ。そのたびに幼い頃に親しくなった河原者たちが現れ、危機を救われる。

親鸞はその者たちと酒も飲み、愛しい女性と結婚もし、子を成して家庭ももった。人それぞれに、ありのままに念仏することが大事と人々に説く法然の言葉は、あくまで優しい。

法然は『選択 本願念仏集』を「私の命を預けるに等しい」といって親鸞に預ける。それほどの信頼が周囲の激しい妬みを買う。

法然の高弟の中から世間の響をかうような輩が出てきて、不行跡な動きが目立ってきた。それに呼応して法然一門に対する陰謀や弾圧の嵐が吹き荒れることになる。

そして、七十五歳の法然には僧儀召し上げと、土佐へ遠流という院宣が下された。

苛酷な処置である。かたや親鸞は越後の国府へ遠流となるのだ。京の町には念仏禁制の立札が辻々に建てられ、念仏を唱えることもできなくなった。

「遠く越後の人々に選択本願念仏集の心を伝えるに行く。私は流されるのではない。これを手渡すために赴くのだ」という親鸞の言葉に、法然は「選択集を広く人々に読んでもらうがよい」と返す。

これが二人の永遠の別離となった。

親鸞は愚に還るためすべてを捨て、禿頭

の凡夫として、瓦のかげら、つぶて、小石のような、友達でもあり師でもある人々に送られて越後に出立する。そして、日に米一升と塩一勺を支給される流人ではあるが、市井の人々と共に闇の中に光を求めて生きるのだと心に誓う。

五木親鸞は言う。生きて浄土にゆけるかどうかは「いつでも誰でもというわけにはいくまい。波間に漂うわれらを救わんとし

て現れたのが、阿弥陀如来という仏だと一筋に固く信じられるかどうかにかかっているのだ」と。

親鸞が流された越後に来たのは、何か目に見えない力で、親鸞に引き寄せられたのだろうか。今、私が目にする雪に覆われた湯沢の町は陽光に輝いている。それは、この越後にも春の訪れが近いことを告げているようだ。

自由執筆

高千穂降臨地探索紀行

村上 邦治

記紀神話のクライマックスは、何といつても天孫降臨の場面であろう。しかし肝心の降臨地については未だ何処なのか、決着していない。

『古事記』では「筑紫の日向の高千穂の久土布流多氣に天降り坐しき」と記し、現在の高千穂町くしふるの峯とされている。続く「此処は韓国に向ひ、笠紗の御前（鹿見

島県笠沙町の野間半島）に真来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり」の記載から、霧島高千穂峰の説も有力である。

『日本書紀』本書では、「日向の高千穂のくしふる峯に天降り」としており、降臨地は一致している。ところが、同第三書では「日向の襲の高千穂のくしいの二上峯」とし、『日向国風土記』逸文においても「臼杵郡内知鋪郷。日向の国の高千穂の二上の峰」と記し、高千穂町と隣接する五ヶ瀬町の境界にある二上山（一〇八二メートル）とする。

さらに同六書では「日向の襲の高千穂の

添そひりの山峯」とし、日向、豊後、肥後の国境の祖母山（一七五六メートル）としている。これら文献から降臨地は、霧島高千穂峰とするものはなく、臼杵高千穂にある三ヶ所に絞ることができよう。

そこで何がしか掴めればと思い立ち、高千穂へ行ってみることにした。

福岡からは直通高速バスで三時間半かかる。阿蘇外輪山の外側に沿いながら南に走り、深い峡谷を何度も渡る、まさにそこは秘境の地であった。

観光協会で案内書入手して目的のくしふるの峯を目指した。現在周辺は神話史跡

コースとして整備が続けられている。

このコースには同名の神社（くしふるの峯を神体とし元祿に造営された社殿へ祭神ニニギノ命）、荒立神社（猿田彦と天鈿女命が結婚の際に荒木で急いで作った社）、高天原遥拝所（天孫降臨後諸神がこの丘で高天原を遥拝した所）、四皇子峯（神武天皇の兄弟四皇子が誕生した場所）などが散在し、静かな散策コースであった。

藪の中の細道を進むと、小高い丘の前に着いた。そこがくしふるの峯であった。

しかしここにあるくしふるの峯は、拍子抜けするほど低いものであった。岳、峯といえる高さは到底なく、丘という方が相応しい。目の前の峯は、記紀神話でニニギノ命が天空から降臨したとは思えない余りに低い雑木林であった。此処が本当に記紀神話の降臨地なのかと、暫く考え込んでしまった。そして確信した。「神話の編纂者は高千穂のくしふるの峯を見ていない」と。この地については多分太宰府の官吏から聞いたのであろう。また太宰府の官吏も直接この遠くで山深い高千穂を訪ねたことはなかった。編纂者には、人がいかなない辺鄙な所で、しかも「高千穂」という皇孫が最初

に降り立たれるに相応しい地名で、しかも神秘的な峯を意味する「くしふるだけ」があるのは都合よかったのだ。

しかし、くしふるの峯は余りに低いことが神話完成後に判明したのだろう。それゆえ既に高千穂で崇められていた二上山に修正せざるをえなかったのだ。さらに「天の八重たなびく雲を押し分けて」のイメージに、より近づけるため、祖母山を付け加えたものと思われる。つまり編纂者がくしふるの峯は高い山との誤解から『日本書紀』

自由執筆

ロシアに眠る幕府の大砲

（友の会） 諸橋 奏

『ロシアに眠る幕府の大砲 江戸後期の紛争略奪品』平成二十二年九月六日付朝日新聞記事の見出しである。サンクトペテルブルクの砲兵博物館で大砲二門を確認、と。そのうちの二門には、戦国時代九州で名を馳せた大友宗麟を示す「FRCO」（洗礼名フランシスコの図案化）の刻印があった

の異説が加えられたものと思われる。

かくして『古事記』編纂者の記した天孫降臨地は正に此処高千穂のくしふるの峯であった。後刻町役場で峯の高さを聞くと、海拔四二メートルで、役場は四百メートル弱のことであった。

当峯にある天真名井（降臨の時、この地に水がなく天上から移されたと伝える）の今でも滾々と湧き出している清水を見ながら大いなる満足感に浸り、くしふるの峯をあとにした。

という。この砲は宗麟がポルトガル人を通じて、天正四年（一五七六）に、日本で初めて輸入した二門の大砲のうちの二つ「フランキ（ヨーロッパ人の異称Ⅱ大砲）砲」。「国崩し」の異名で人々を震撼させた新兵器であった。

事実この大砲の威力で、宗麟は宿敵島津義久に追い詰められた大友最後の臼杵城籠城戦（天正十四年）を耐え抜いたのである。大砲のその後の所在については、諸説があったが、それがロシアにあったとは！

宗麟輸入のもう一門は、廃藩置県時に国

に献上され、現在靖国神社の「遊就館」に展示されているという。

宗麟と大砲と言えば、横光利一の小説

『旅愁』を思い出す。作者の分身、主人公八代は「九州の先祖の城はカソリックの大友宗麟に、日本で最初に用いられた国崩しと呼ばれた大砲のために滅ぼされた」と記している。本人はこの言い伝えを信じていたようだが、史実は、利一の父の出自は宇佐市赤尾、当光岡城主の赤尾氏は大友方で戦っており、話は逆だったようだ。ことモチーフにかかわること、読者は作品の『旅愁』と相対すべきものであろう。

ロシア収蔵の他の一門は、日本の記録では「さほりの大ハラカン」と呼ばれた、豊臣秀吉の軍が朝鮮から大坂城に持ち帰ったと伝わるものとのこと。大坂夏の陣（元和元年）では城が焼失したことや、「さほり（胡銅器、銅を主とした黄白色の合金）の大ハラカン（子母砲）」のハラカンは広義ではフランキに含まれるものの、用語としては「江戸末期に外国から渡来した火砲」を指すことから、その足跡を知りたいもの。

また、「日本の記録」とは……。
文化元年（一八〇四）ロシア皇帝アレク

サンドル一世の使節レザノフが長崎に来航、通商を求めたが幕府に拒否される。報復としてロシア船は文化三年に樺太の日本側拠点を、更に翌年には択捉島・樺太・利尻島を襲撃した。この「文化露寇」の折、利尻で幕府船から砲が奪われたとの記録を指す。日本は寛永十六年（一六三九）以降、鎖国体制下にあり、当事件は平和を楽しんでいた日本人への最初のゆさぶりであった。

一方、ロシアは、一六一三年にロマノフ朝が成立（一八一七）、ピョートル大帝（在位一六八二〜一七二五）やエカテリーナ大帝（一七六二〜一九六）始め歴代皇帝は国勢伸長、領土拡大に努めた。東進南下である。中でも一六六一年中国全土を統一した清国との国境画定は大問題であった。主な条約として、一六八九年ネルチンスク条約、一七二七年キャフタ条約、一八五八年愛琿条約、八一年伊犁条約が挙げられる。そして一九〇三年（明治三六）の満州占領である。日本とは先の露寇事件、一八五四年（安政元）日露和親条約、六一年（文化三）軍艦ボサドニツク号対馬基地強行建設事件、七五年（明治八）樺太・千島交換条約、九四年日清戦争、九五年の三国干渉、

そして一九〇四年日露戦争へと続く。ところで、一昨年ロシアは北朝鮮北東部の清津港使用権を取得した。「ロシアの南下は地政的本能」と『坂の上の雲』はいう。

事務局だより

※会員の活動

○小田絃一郎氏

桜美林大学オープンカレッジ

テーマ「食を考える、楽しむ」

五月八日より毎週火曜日（全六回）

プラネット淵野辺キャンパスにて

○柴田弘武氏

目黒区社会教育登録団体

「歴史を楽しむ会」講座

テーマ「常陸国風土記から東国を考える」

毎月第一日曜日午後（全十一回）

目黒区中央町社会教育館にて

※通信No.206訂正のお願い

2頁中段25行 あろ^うが^しあろ^うか

7頁上段11行 クラス^し二クラス

同 21行 無い^な無し

下段16行 専門学校^し専門学校